

清水喜市と神崎郡水平運動・融和運動

—— 地方改善費増額と社会進出を求めて ——

高木 伸夫

要 約

地域における水平運動・融和運動の実態と展開は指導者の個性や地域の置かれた状況などから画一的なものではない。本稿では神崎郡水平社の委員長として兵庫県水平社を牽引してきた清水喜市の生涯を通じて、融和団体・兵庫県清和会への接近から小谷地区整理事業、兵庫県更生連盟の組織など活動と実践の全体像に迫る。

はつめい

本稿で取り上げる清水喜市は兵庫県神崎郡水平社の委員長であり、清水の指導する神崎郡水平社は飾磨・加東郡水平社と共に、一九二〇～三〇年代初頭、兵庫県水平運動の牽引力として活動してきた。清水はまた、融和団体である兵庫県清和会の理事、神崎郡支部の副支部長と

しても活動しており、彼の行動を取り上げるとは兵庫の水平運動・融和運動を再検討する上で格好の素材といえよう。

清水喜市は一八九三（明治二六）年三月二六日に兵庫県神西郡甘地村小谷（現、市川町）に八人兄弟の長男として生まれ、一九一二（明治四五）年四月に横浜英語学校に入学、翌年に中退し家業の農業に従事した。清水家は田畑五町歩を有し、父の好太郎は一八八九年には村会

議員となっており、「神西郡の未解放部落でも資産家のほうであった」^①。本稿では清水喜市と神崎郡水平運動・融和運動の取り組みを四期に分けて、その軌跡を明らかにする。

一 兵庫県水平運動・融和運動と清水喜市

(一九二三年～一九二五年)

1 神崎郡水平社と清水喜市

清水喜市は一九二二(大正一一)年三月の全国水平社創立大会に「三十余人の仲間とともに参加した」という。清水家では幸太郎が大和同志会の機関誌『明治之光』の購読者であり、『明治之光』^③の購読者の線から全水創立の呼びかけが送付されたと思われる。

播磨地方における水平社結成は長田調五郎らの努力が大きい。一九二三年二月に全国水平社本部は「比較的此の宣伝の行き届いて居なかつた本県(兵庫県―引用者)に全力を注ぐこととなり」(「神戸新聞」一九二三年二月二六日付。以下「神戸」23、2、26と省略する)、宣伝部員米田(富)、長田調五郎らが同月二二日から加古、印南両郡方面に出張して連日講演会を開催する。長田はまた、

三宅正巳と共に西日本水平社創立委員として加古郡本庄に仮事務所を設置し、四月から東播磨地方各地で演説会を計画、同月七日には加古郡北別府で宣伝演説会を開催した(「大阪朝日新聞神戸付録」一九二三年四月九日付。以下「朝日神戸」23、4、9と省略する)。また、飾磨郡花田村高木でも水平社大会が四月一二日に開催(「大阪毎日新聞兵庫県付録」一九二三年四月一四日付。以下「毎日兵庫」23、4、14と省略する)され、発会式は五月一日に開かれた(「毎日兵庫」23、5、12)。

さらに播磨水平社大会が二三年四月一八日に加古川町公会堂で開催され、長田調五郎が開会の辞と経過報告、神崎郡代表清水喜市が綱領を朗読した。参加者には黒衣同盟の鷹野有隣、藤末恵正、藤本静雄ら「水平運動の花形が殆ど全部をこの一堂に錘めたかの観があ」った。演説会に移って清水喜市が「水平運動の必要に就て」訴えた(「神戸」23、4、19)。

神崎郡の水平社設立はこれら東播磨地方各地の水平社結成の影響を受け、二三年の夏前後にピークを迎える。同年四月二二日には甘地村小谷の教正寺住職藤末恵正が甘地小学校で水平運動に関する第一回講演を行うが、藤末の講演は「一般部落児童ハ恐怖ノ念ヲ抱キ、部落児童トノ間ニ円満ヲ欠キツ、ア」として神崎郡長が村長に

報告を求めるに至った。⁵⁾さらに七月一日には神崎郡水
平社夏季大会が辻川村振武館で開催され、黒衣団闘士の
数十人、栗須七郎らも数百の会衆と共に参加した。大会
では清水喜市が「昨年三月三日、京都岡崎公園に於て全
国六千部落三千の代表により呱呱の声を挙げてより十五
箇月、吾同胞の自覚運動により隆々たる意気の旺盛を見
るは欣悦至極なり。明治四年吾同胞が解放されて五十年、
頑迷の社会は機会を待てと云為するも、五十年の慢性的
病系を癒すは自然療法を待つ可らず。即ち吾等が奮起に
よつて茲に外科施術を行はずんば止む可らざるに到れ
り」と演説し、同人の奮起と、「外科施術」、即ち徹底的
差別糾弾を促した。さらに堀尾藤太郎が宣言、綱領を朗
読し、西塚政次・橋本郁太郎・藤末恵正らも演説した
〔神戸〕23、7、12。また、寺前村野村では七月二八日
に栗須七郎を招き、水平社宣伝演説会が開かれ、八月二
八日前後に水平社を結成〔神戸又新日報〕一九二四年三
月一三日付。以下「又新」24、3、13と省略)する。清水
喜市の地元である甘地村小谷水平社は、前述した神崎郡
水平社夏季大会の前後に結成されたと考えられる。

一九二四年七月二〇日には神崎郡水平社第二回大会が
郡公会堂で開催された。清水喜市が開会を宣言し、「兵
庫に於ける反動的改善団体である清和会に対して絶対反

対する」との議案を満場一致で可決する。すでに、同年
五月の第二回兵庫県水平社大会に於いても神崎郡水平社
は「小学校教員に対し水平運動を理解せしめる件」と「清
和会趣意に反対するの件」を提案、可決されている〔又
新〕24、5、27。

翌二五年一月一日に全兵庫県水平社執行委員長会議が
開かれ、長田調五郎が県水平社委員長に再選され、組織
変更を審議し、各地方水平社互選の結果、神崎郡は清水
喜市が執行委員に選出された。また、小谷水平社は「普
通民に対して水平運動の精神を了解せしめるため」、講
演会開催を甘地村長、小学校長に協力要請し、開催に漕
ぎ着けている。⁸⁾さらに、中寺村野田の部落総会では「水
平社加入略ポ決定」するなど組織拡大も進行した。⁹⁾

神崎郡水平社の活動を概観すると、教育現場での差別
待遇撤廃など差別事象糾弾と、役場吏員への採用など社
会的進出に目標を定めたことに特徴が見られる。まず、
差別糾弾から見ると、二三年八月三〇日には寺前村
小学校の児童が学校内で差別言辞を行い、野村の児童が
これをとらえて父兄に告げ、受け持ち教員と校長に謝罪
状を書かせた〔又新〕23、9、1。野村では前述した
ように、二日前の八月二八日に水平社を結成したばかり
であった。寺前小学校児童差別発言糾弾は警察と検察の

弾圧によって一人名も有罪となり、神崎郡水平社に多くの教訓を残した。その一つは警察の弾圧を招かない糾弾闘争の有り様への模索であった。寺前小学校児童差別発言糾弾直前の八月二二日には清水喜市の地元である甘地村の村長の息子が同村尋常高等小学校内で小谷の児童に差別発言を行った。九月一日午後からそれぞれ委員を立て談判するが、村長側は差別発言そのものを否認し、三日午後一時になっても容易に解決しなかった。郡役所から書記二名が出張して調停を試みたが、地元民数百名が小学校付近と寺院に集まり経緯を見守る中、福岡署長以下署員全員が警戒に当たった（「又新」23、9、5）。西塚政次は「糾弾が八月三〇日ぐらいから始まり、関東大震災の当日、九月一日に解決した」と回想しているが、「三日午後一時になっても容易に解決しなかった」のであり、『甘地村小学校沿革誌』が記述するように、三日午後一時以降に解決したのである。

社会的進出に眼を向けると、神崎郡水平社が融和団体清和会に対して「絶対反対」の立場を鮮明にした二四年四月には西塚政次が甘地村役場の吏員に採用されている。西塚が甘地村役場の吏員に採用されたのは、西塚自身が証言するように甘地小学校児童差別発言糾弾の結果、村長が口頭謝罪後に退職し、後任村長候補が清水喜

市に支援を求め、清水が承諾したことが背景にあった。¹³ 楠田雅一郎村長は二三年九月四日に退職し、楠田豊吉が後任村長に就任したのは九月二二日である。¹⁴ さらに神崎郡役所、兵庫県清和会の郡水平社に対する変化も見逃すことができない。次に郡役所、兵庫県清和会の郡水平社への対応を見てみよう。

2 兵庫県清和会と清水喜市

全国水平社創立後、県下各地でも水平社が相次いで結成され、差別糾弾が激化していた一九二二（大正一一）年七月、兵庫県は融和促進機関の設置を目的に四市二四郡の代表者五名程度を郡・市長に推薦させ、同月二七日と翌日に地方改善協議会を県会議事堂で開催する。協議会では二八日に全県下を統一する融和機関設置を確認し、発起人会に切り替え、県社会課立案の趣意書、融和機関組織要綱を一部修正の上、満場一致で可決し、会名を県知事腹案の「兵庫県清和会」と決定した。¹⁵

注目すべきことは、神崎郡からは清水喜市も推薦され（「朝日神戸」23、7、26）、協議会に参加していることである。時あたかも神崎郡内では郡水平社夏季大会が開催（二三年七月一日）され、さらに寺前尋常小学校では野村の児童に限って喇叭を吹かせないなどの差別待遇があ

り、村民が上野校長に差別待遇の撤廃を要求（「又新」24、3、13）しており、憤激が高まっていた。清水喜市の兵庫県清和会への接近は一九二六年の郡役所廃止前後から、というのが通説であったが、それよりも早く、清水喜市は神崎郡水平社結成当初から水平運動と融和運動の両者を睨みながら活動していたのである。

兵庫県清和会は県知事を会長、常務理事に県社会課長を据え、「国民ハ拳ゲテ陛下ノ赤子」であり、「県民ノ一致協力」して「因襲的偏見ノ絶滅ヲ期」すことを趣旨とする半官半民の団体であったが、機関紙『清和』の主張には「融和運動は宗教運動である」との立場から水平社の主張を承認し、暴力を伴う糾弾には反対する主務嘱託の内海正名と、排他的闘争的態度を斥け他愛的協調を力説する県社会課長松岡英介の主張などが混在していた。¹⁸

県清和会神崎郡大会は一九二四年三月初旬に開催され、大会では某が「部落民の祖先卑しからざることを説き、清和の目的を述べ、県社会課内海嘱託が極めて熱烈な口調で」講演、「国体擁護等あらゆる方面より説き、一同に多大の感動を與へた」という。当日は「約三百名の出席者があり、極めて盛会」であったとも報道されている（「神戸」24、3、3欄外）。

兵庫県清和会は翌二五年に入って「実地の状況視察の

ため神崎郡一円に係員を出張させ、地方有志と融和促進のため徹底的に協議」する方針を打ち出した（「又新」25、2、20）。三月には田原村役場が兵庫県清和会会長（県知事）の「申越」により融和促進問題に関する懇談会を同村小学校で開催している。さらに、水平社が組織されている中寺村野田では清和会の委員会が同村小学校で開催され、県清和会嘱託軌保（昇證カー引用者）を交えて道路修繕の件などを協議している。中寺村野田では運動面では水平社に、事業では清和会の両方に参画していたのである。二五年四月二六日には前年七月の神崎郡水平社第二回大会での「清和会絶対反対」の立場から一転して県清和会の内海正名嘱託を招き、寺前村野村で水平社臨時講演会が開催されている。講演会には水平社からも五、六名が意見発表を行い、内海が「部落解放に関して」、藤本政治は差別撤廃に関して演説する。藤本は同年五月の全国融和事業大会席上で「融和団体は水平社を無条件で承認せよ」と迫ったが、兵庫県からの出席者からも反対、保留論が出ている。²⁰しかし、U生（内海正名カー引用者）は「全国の融和大会に於ても気焰を挙げた点に於て全国一。融和団体は水平社を如何に見るかの緊急動議を出したのは本県の藤本政治氏だ。熱に於ても全国第一」と好意的評価を行っている。²⁰

こうして、神崎郡水平社が県清和会と協調していくと、郡清和会は一挙に活動を加速させていく。二五年七月二九日と翌日にかけて県清和会は中堅青年講習会を福崎町振武館で開催し、郡内各村の青年七十余名が参加した。さらに同年九月には兵庫県清和会神崎郡支部が郡内七小學校を会場に講演会を予定し〔神戸〕25、9、10）、一〇月には甘地小學校で講演会が開催されている。兵庫県清和会神崎郡支部は郡水平社との協調路線で郡内に影響を広げていくのである。

二 郡役所廃止と神崎郡水平社

(一九二六年～一九三〇年)

兵庫県清和会神崎郡支部は一九二六(大正一五)年四月の郡役所廃止に伴い、支部長に花圓淵澄、副支部長に清水喜市を選出する。西塚政次らも郡清和会に参加するようになると、神崎郡水平社は同時に郡清和会傘下でもある、といった一種奇妙な運動体として活動を続けていく。その実態と論理を検討していこう。

1 兵庫県水平社と清水喜市

神崎郡水平社は一九二六(大正一五)年五月一九日に

第四回大会を福崎町小學校で開催する。大会では「部落民を欺瞞する政府の恩恵的改善策及び部落民解放の精神を麻痺せしむる一切の教化に対する排撃」など三つの決議が可決された。討議では清水喜市が地方改善費問題の提案理由を「県の改善費(使)途を見ると、水平社に加入せぬ部落のみに支出しつゝある。融和運動をすれば直に金を出すとは怪しからぬ。斯かる反問苦肉の策による改善費は拒絶したい」と述べた〔神戸〕26、5、21)。神崎郡水平社の中では一見、清和会に対して改善費のボイコットを呼びかける清水喜市・堀尾藤太郎と緩和説を取る藤末恵正の二者に分かれているようにも見えるが、清水・堀尾も恩恵的支出に反対しているのであり、水平社未加入の部落のみに限らず、水平社加入部落にも改善費の支出を要求しているのである。ここに清水喜市が神崎郡清和会の副支部長に就任した根拠があった。

2 兵庫県水平社刷新運動と清水喜市

一九二九(昭和四)年、岸本順作・酒井力彌らの水平社解散論と県清和会接近に反発した前田平一らは一〇月五日、兵庫県水平社革新同盟の名で岸本らを「支配階級の欺瞞機関で水平社と絶対相容れない融和団体の県清和会と通じている」と批判、墮落幹部の一掃と内部の一大

革新を呼びかけた²⁸。神崎郡水平社を中心とする播磨地方の水平社同人は翌六日に開催された神崎郡水平社大会で県水平社幹部の排斥を決議する。引き続き二八名の委員によって県水平社の清算をなすべく、岸本・大本・酒井の除名を決定した(「又新」29、10、9)。同時に全国水平社播磨連合会の組織が確立し、委員長に清水喜市、書記長には古瀬兵次、組織部には藤末恵正ほか一名などが決定された²⁹。県水平社刷新に果たした清水喜市ら神崎郡水平社の位置が大きかったことが伺える。

この頃の清水喜市が合法左翼の新労農党神戸支部常任古家実三にあてた書簡²⁹二通によれば、一〇月六日の神崎郡水平社大会で新労農党支持も協議していた。一二月一日には姫路で委員会が開かれ、新役員として県連委員長に前田平一、委員に清水喜市・古瀬兵次・加茂田貫二らが選出され³¹、副委員長に清水喜市が就任した(「毎日兵庫」29、12、23など)。三〇年五月には神崎郡協議会第七回大会が福崎町振武館で開催され、県連合会確立促進、未組織地開拓など数件を審議した。これを報じた「水平新聞」は「同協議会は兵庫県に於ける中堅地方で、此処の積極的活動は、近き将来に県連の確立を見るであろう」と論評している³²。

一方、県連合会委員長前田平一は兵庫県清和会に対し

て厳しい態度を示し、三〇年一月に開催された兵庫県水平社委員会では「清和会に対する決議をもたらし」(「神戸」30、1、28)た。県連は六月に朝日マツチ工場の閉鎖による住吉の同人の解雇に社会民衆党と共同で神戸市助役などに四項目の要求書を提出する。闘争の経緯を報道した「水平新聞」は「以上の要求の理由書中、第二項の中に改善費の問題に触れていないことが手落ちだが」と、失業者救済を地方改善費の獲得で行え、と強調する。全水の立場からコメントしている³³。しかし、前田ら県連幹部は地方改善費の獲得には積極的ではなかった。むしろ、前田は政治的野心から社会民衆党の活動に軸足を置き、早くも三一年には水平運動そのものを等閑視するようになる。これに対して清水喜市は地域の独自課題を追求し、地方改善費の獲得を重要視していた。この路線の違いが三一年以降、清水の清和会に軸足を置いた行動へと繋がるのである。

三 兵庫県清和会神崎郡支部と清水喜市

(一九三二年～一九三六年)

清水喜市は全水機関紙「水平新聞」防衛基金の募集に応えて二円を送付するなど全水を支持していたが、三一

年五月に古瀬兵次と共に兵庫県清和会本部委員に嘱託される。郡副支部長から本部委員となった清水は一層、清和会の活動に全力を傾ける。甘地村役場書記の西塚政次が取り上げた帝國興信所姫路支局員の差別発言も水平社代表と県清和会の内海正名が対処している。七月には融和促進講演会を鶴居村小学校で開催し、清水・古瀬と内海正名・花圓淵澄郡清和会支部長らが講演している。

清水喜市は翌三二年、北中皮革第二次争議の犠牲者家族救援委員会に古瀬兵次と共に名前を連ね、一月二日の福崎町で開催された真相演説会⁽⁴⁰⁾を最後に水平社運動から距離を置く。三三年の高松差別裁判糾弾闘争に甘地村連合青年団は全水本部に檄電を寄せたが、清水ら神崎郡水平社は請願行進にも参加しなかった。全国水平社は一九三三年三月の第一一回大会前に積極的に改善要求を行うべきとする「部落民委員会活動」を提起するが、清水は自村の整理事業に没頭するのである。

1 小谷地区整理事業と清水喜市

小谷の地区整理事業は一九三二年度から着手された。⁽⁴³⁾総工費二五万円、国と兵庫県からの補助金が五万五千元、地元負担は一四万円とされている。⁽⁴⁴⁾兵庫県の三三年度社会改良事業補助予定一覧表には土木事業として甘地村小

谷の地区整理事業の予算額は一一五〇〇円、補助要求額は九二〇〇円、査定額は一〇〇〇〇円、補助見込み額は五〇〇〇円であった。⁽⁴⁵⁾三四年三月には甘地村長が小谷地区整理事業完成のため起債を兵庫県知事に申請している。その理由書によれば、事業着手二年目にして計画の約三割施行の現状から、容易な事業ではなかったことが判明する。最終年度の三四年度に三三二〇〇円を大蔵省から年三分二厘の利息で借入し、翌三五年から四三年の九年間に元利均等半年賦償還する、とした「起債ノ為スノ件」(村議会に二月二七日提出)を見ると、甘地村にとっても大きな負担であったことが解る。小谷地区整理事業を推進した清水喜市はさらに地方改善費の獲得を兵庫県下に及ぼそうと邁進する。

2 地方改善費獲得運動としての兵庫県更生連盟組織と清水喜市

一九三二(昭和七)年八月二七日、内務省社会部部長富田愛二郎は関係府県知事宛に「地方改善急務施設に関する件」を通牒、翌九月には内務大臣が学務部長会議の席上、同様の訓示を行った。しかし、従来の兵庫県地方改善費予算はわずか年額七万円と僅少のため、三三三年には兵庫県清和会の役員間に同会とは別に被差別部落

民自身の手によって地方改善事業の指導奨励などを目的とする機関を結成しようとする議論が持ち上がり、一月二日に古瀬兵次外二〇名の参加で兵庫県更生連盟創立発起人会を県議事堂で開催する。発起人会では綱領（草案）「一、我等は迷蒙なる僻見の觀念を打破し、形象の区画改廃を期す。一、我等は政治的進出と経済的自由の獲得を期す」などが協議された（「神戸」33、10、3。「又新」33、10、3）。神崎郡では一月四日に早速、神崎郡青年更生連盟が福岡劇場で結成されている。

この後、兵庫県内各地区に加盟が呼びかけられ、氷上郡春日部村池尾区でも一月一九日の役員会で「右、報告ニ共鳴シ一名ヲ申告スルコト」を決定、代表一名が参加することになった。同月二日には兵庫県更生連盟創立大会が同じく県議事堂で開催され、三四三部落の代表（区長並びに有志）約四〇〇名が出席した。古瀬兵次が司会となり連盟創立の趣旨を説明、和田甚九郎が議長に推薦され綱領・宣言を満場一致で可決した（「神戸」33、10、22。「又新」33、10、15夕刊。同10、22）。一月二七日には古瀬外理事一名が県知事・内務部長らと会見し、経済的圧迫下にある部落民の徹底的改善を短期で完成させるため年額七万円の地方改善費を十ヶ年五百万円の交付を陳情（「神戸」33、10、28。「又新」33、10、31）

するなど前後四回にわたり折衝、懇談を重ねたが、部落改善費の県費補助七万円がわずかに一割の増額が認められたに過ぎなかった。清水喜市らは県議会各派の有力議員に増額を懇請したが、「一人の真剣に吾等の意図を諒解して協力を為さんとする議員なく、実に彼等の無理解に切歯扼腕すると共に我が更生連盟の政治的進出、議席獲得の忽かせにすべからざるを痛感」する。この認識が清水喜市の甘地村村長、県会議員選挙出馬など政治的進出の動機となるのである。

この間、兵庫県清和会一〇周年大会が三三年一月二日（兵庫県更生連盟創立大会の翌日）に氷上郡柏原町公会堂で開催され、融和事業に対する国庫、地方費予算増額など五項目の決議が採択された（「又新」33、10、24）。会場で配布された『回顧十年』に清水喜市は「過去十年を顧りみて」と題する文章を寄せている。

地方改善費獲得のための兵庫県更生連盟の運動は県会有力議員の協力が得られず、兵庫県更生連盟理事として奔走していた古瀬兵次は焦燥感から突如「家出」する。信頼する古瀬を失い、しかも翌三四年は大風水害のため予算編成期の増額運動は差し控えざるをやむなきに至った。地方改善費増額運動はこれ以降、中央融和事業協会と兵庫県清和会など融和団体に委ねられる。

清水喜市らは三五年秋の県会議員選挙に和田甚九郎（武庫郡良元村前助役、県清和会副会長）を立候補させ、部落民の意志を県議会に反映させようとした。清水は「惟ふに諸般の情勢は部落運動の一大展開を策するにあらざれば到底更生の目的を果たし難く」、「全国の同胞に呼びかけて徹底的協力を要請する計画を樹立すると共に、今後中央と地方とを問はず、機会ある毎に吾等同志中より議員を選出し、政治的活動により内外呼応して更生連盟の使命貫徹に邁進するの要、緊切」と訴え和田を推薦、県内全地区の区長、青年会長らに推薦状を郵送する。和田は民政党から立候補し二六〇五票を集めて最下位で当選した（「又新」35、9、27）。さらに清水らは「全国の同胞に呼びかけて徹底的協力を要請する」ために全国更生連盟を結成するが、その活動実態は不明である。

3 兵庫県清和会理事と甘地村長就任

清水喜市は一九三六（昭和一）年三月に兵庫県清和会理事に就任する⁽⁵¹⁾。同年三月一日に支部長会が開催され、清水委員は差別事実の実際について語り、「個人的差別と云ふ従来の型はよほど薄らいだが、社会的差別とも云ふべきものは猶甚だ濃厚のものあり、此の点大に注意して欲しい」と要望、支部費用として町村から寄付を

得ているが、今年から増額されたことが報告された。また、神崎郡支部から発言が相次いだ⁽⁵²⁾。

清水喜市は同年六月一日には甘地村村長に就任する。この経緯については西塚政次の証言がある。清水喜市の村長就任には反対運動があり、藤末恵正らの糾弾によつて実現したのである。しかし、官憲は清水らの行動を注視していた。翌三七年の神戸地方裁判所検事局思想部の報告書には、「全水神崎郡支部にありては、部落解放は地方自治体における各種機関の獲得なりとし、大阪市全水本部及び管下県連各支部と連絡を密にし、同社執行委員長甘地村村長清水喜市指導下に、あらゆる機会に乗り、神崎郡内各村における村長、助役、農会長等の要職を獲得すべく画策中⁽⁵³⁾」と記述された。清水らの要職獲得運動は水平運動の再興として警戒されていたのである。

四 日中戦争期の兵庫県清和会と清水喜市

（一九三七年～一九四〇年）

1 日中戦争期の清水喜市

一九三七（昭和一二）年、兵庫県学務部社会課の社会事業関係で贖職収賄が発覚し、清水喜市も三月八日早朝

に召喚され、福崎署で取り調べを受けた後、翌九日に神戸に連行された（「神戸」37、3、9）が、清水と藤末恵正は五月に村会議員に再当選している（「又新」37、5、11）。翌三八年一〇月には郡内一〇カ所で「銃後援強化週間活動写真講演会」が開かれ、清水は「支那事変、最近の戦況と皇軍の労苦を偲び、チエツコ問題と独逸民族の団結力に説き及んで銃後強化と融和一如」を訴えている。⁵⁵

清水は三九年五月初旬に郷土出身兵士慰問と「満州」移民団視察のため出発し、六月初旬に帰郷する（「朝日神戸」39、6、11など）。この経験を受けて、七月に兵庫県清和会神崎郡支部が郡教化連合会と共催で巡回講演会を郡内各町村小学校一三カ所で開催し、清水は「皇軍慰問と大陸視察」を講演している。⁵⁶さらに清水は兵庫県清和会第二回自覚更生指導者大会（一九三九年八月）の席上、協議事項である「大陸進出に関する件」を説明、満州移民を奨励した。⁵⁷

清水喜市が甘地村長を辞任して県会議員に立候補したのは一九三九（昭和一四）年九月である。届出には政党からの推薦はなく、中立であった（「神戸」39、9、5）。選挙は政友会公認現職と民政党公認新人の有力者が立候補し、清水にとって当初から厳しい戦いであった。神崎

郡の定数は一名であったからである。選挙結果は一三七五票を獲得したが、三位で落選する（「神戸」39、9、27）。

2 興亜親民会と清水喜市

清水喜市、和田甚九郎らは一九四〇（昭和一五）年に興亜親民会を結成する。⁵⁸同会は和田甚九郎のかねてからの信念に基づく民族協和の徹底、国民親和の完成を実現するための運動体として組織された。和田は前年にも「我々は多年融和運動を続けて来た。これは東亜新秩序建設運動と同一理念である。だから融和運動といふ従来の名称をかへて東亜親民会といふやうな名の下に、大きな目標で運動したいと思ふ。即ち、この大運動の一支流が所謂融和運動といふことでありたい。否、やがて左様な時が来るのではあるまいか」と発言している。清水喜市の関与について、鉄拐山人は、親友清水喜市氏を偲ぶ⁵⁹に「一面、盟友和田氏と携へて興亜親民会を結成、国策順応の大運動、国策第一線の先頭に立つての組織的な運動に着手しやうとして居た時、突如その計報を私共に伝えることになられたのである」と回想している。同会は第一回総会を同年一〇月一七日に神戸市内の医師会館で開催し、宣言・決議を採択しているが省略する。

清水喜市は「盟友」和田甚九郎と戦時下、二人三脚で

兵庫県更生連盟をはじめとして、全国更生連盟・興亜親民会などを組織してきた。和田が東亜新秩序建設運動の一環としての興亜運動を進めたのは、戦時下における兵庫の融和運動を一層新体制に順応させることを目的としたものだが、清水の意図は和田と同一のものであったのだろうか。清水は興亜親民会にかかわりながら、地元民の経済的支援を図るため「工場をつくろうと上京」し、折衝中に東京の古瀬兵次の事務所で倒れたのである。^②

おわりに

清水喜市の四七年間の生涯は差別撤廃と経済的自立、そのための環境整備に貫かれていたといえるだろう。部落民自身による解放の実現のために先頭に立って奮闘した。それは神崎郡清和会副支部長、兵庫県清和会理事になっても一貫していた。鉄拐山人は「清水氏は何等の野心も自己本位もない一個純真な道の人であった。国民融和の運動のために専念した人なのである。後に清和会の幹部となられたのも、その精神の発展的な結果であったのだろう^③」と回想する。筆者の鉄拐山人とは清水喜市が信頼していた長田調五郎のペンネームと思われる。^④清和会の幹部になった理由を「精神の発展的な結果」とする

のは興味深いが、長田も興亜親民会第一回総会（四〇年一〇月）で指導部長に就任しているので、割り引いて考えねばならないだろう。しかし、清水を「水平運動と融和事業の癒着^⑤」と見るのではなく、差別撤廃と部落の経済的自立を水平運動・融和運動の両側面から追求してきた人物として理解することが重要であろう。

付記

史料の引用にあたっては、旧字体は新字体に改め、句読点を新たに付けた。新聞記事などの人名の誤記は改めた。

註

- (1) 兵庫県教育委員会『郷土百人の先覚者』一九六七年七月、六四五頁
- (2) 前掲「郷土百人の先覚者」六四八頁。今井ひろ子「神崎郡における水平社運動と融和運動」兵庫部落解放研究所『ひょうご部落解放』47、一九九二年六月、四〇頁
- (3) 「告知欄」明治之光社『明治之光』三卷三号、八〇頁、一九一四年三月（復刻版、兵庫部落問題研究所、中巻、七五六頁）

(4) 甘地尋常高等小学校「甘地村小学校沿革誌」

(5) 『機密二関スル書類綴』自大正五年十一月至昭和三年十

- 二月、甘地村史料(『同和教育史兵庫県関係史料』二巻、四二三〜四二四頁)
- (6) 『寺前事件訊問調書』
- (7) 「水平新聞」三号、一九二四年八月二〇日付。なお、「大阪朝日新聞神戸付録」七月二三日付では第二回神崎郡夏季大会
- (8) 「水平線兵庫県付録」四号、一九二五年一月二〇日付
- (9) 森岡家文書『記録帳』(『同和教育史兵庫県関係史料』一卷、三九一頁)
- (10) 田宮武「聞き書き」部落解放の人たち(2)兵庫部落解放研究所『ひょうご部落解放』16、一九八四年九月、六四〜六五頁
- (11) 「九月三日、水平問題ニ関シ福崎署長岩崎栄三郎、郡書記柴田氏、甘地村有志参集、解決ス」
- (12) 前掲 田宮武「聞き書き」部落解放の人たち(2)六八頁
- (13) 田宮武「聞き書き」部落解放の人たち(1)『ひょうご部落解放』15、一九八四年六月、八七〜八八頁
- (14) 神崎郡教育会『神崎郡誌』一九四二年五月(復刻版、神崎郡誌刊行会、一九七六年九月、一〇五頁)
- (15) 兵庫県清和会『地方改善協議会議事要綱 附参考資料』一九二三年八月、一〜四頁
- (16) 前掲 兵庫県清和会『地方改善協議会議事要綱 附参考資料』一〇頁。奈良県でも一九二四年三月に開催された県主催の第二回社会事業講習会に県水平社委員長の松本長八が出席して、講習を受講している(井岡康時「奈良県における部落改善事業と水平社運動」奈良県立同和問題史料センター『研究紀要』八号、二〇〇二年三月、四九頁)
- (17) 前掲 今井ひろ子「神崎郡における水平社運動と融和運動」四一〜四二頁
- (18) 内海柳蛙「片言」「清和」一七号、一九二五年六月。松岡英介「融和問題に関する三つの誤れる見方」「清和」一七号、一九二五年七月
- (19) 「融和促進問題ニ関スル件」(『福崎町史』四巻、資料編Ⅱ、一九九一年八月、五〇六頁)
- (20) 前掲 森岡家文書『記録帳』(『同和教育史兵庫県関係史料』一卷、三九三頁)
- (21) 中央融和事業協会『融和事業年鑑』大正一五年版(復刻版、一卷、部落解放研究所、一九七〇年九月、一四一頁)
- (22) 前掲『融和事業年鑑』大正一五年版、四七〜四五頁。手島一雄「中央融和事業協会の創設」四国部落史研究協議会『しこく部落史』八号、二〇〇六年三月、八五〜九

○頁

- (23) 兵庫県清和会「清和」一六号、一九二五年六月
- (24) 前掲『融和事業年鑑』大正一五年版、一一五頁。「神戸又新日報」二五年八月一日付では七月二十八日～二十九日開催
- (25) 前掲『甘地村小学校沿革誌』
- (26) 前掲 田宮武「聞き書き」部落解放の人たち(1) 六五～六六頁
- (27) 「水平新聞」八号、一九二六年六月三〇日付
- (28) 兵庫県水平社革新同盟「兵庫県水平社同人諸君に檄す」古家実三所蔵文書(ひょう)労働図書館所蔵)
- (29) 「解放」一号、一九三〇年一月一〇日付、古家実三所蔵文書(ひょう)労働図書館所蔵)
- (30) 古家実三所蔵文書(ひょう)労働図書館所蔵)
- (31) 「水平新聞」二号、一九三〇年一月一日付
- (32) 「水平新聞」五号、一九三〇年五月三一日付
- (33) 「水平新聞」六号、一九三〇年八月五日付
- (34) 前掲「水平新聞」六号、一九三〇年八月五日付
- (35) 「水平新聞」一一号、一九三二年六月二八日付
- (36) 「清和」七一号、一九三二年六月二五日付
- (37) 前掲『融和事業年鑑』昭和六年版、三〇五頁
- (38) 「清和」七二号、一九三二年八月二〇日付
- (39) 「北中皮革争議花田村騒擾事件に關して／親愛なる全国の労働者農民諸君に訴う」一九三二年二月二四日付(法政大学大原社会問題研究所所蔵)
- (40) 新井磯次「北中皮革争議―思い出すことども」明治図書、一九七八年四月、五二頁
- (41) 全国水平社総本部「高松地方裁判所検事局差別裁判事件闘争日誌」(灘本昌久編「高松差別裁判闘争日誌」京都部落史研究所『京都部落史研究所紀要』二号、一九八二年三月、四六頁)
- (42) 全国大会準備闘争委員会「全国大会準備闘争ニュース」一九三三年二月二三日付
- (43) 『会議書類綴』自昭和八年至昭和九年「甘地村文書」
- (44) 前掲『郷土百人の先覚者』六五〇～六五一頁。「清水喜市」兵庫県社会福祉協議会編『福祉の灯―兵庫県社会事業先覚者伝』一九七一年六月、四〇七～四〇八頁。ともに、事業着手を三一年と誤っている
- (45) 『昭和八年度応急施設事業ノ参考』(同志社大学人文科学研究所所蔵)
- (46) 前掲今井ひろ子「神崎郡における水平社運動と融和運動」四六頁
- (47) 『執務日誌』大正六年二月編 区長(氷上郡春日町池尾区長文書)

- (48) 前掲『執務日誌』大正六年二月編、に綴られている活版印刷物
- (49) 田宮武「聞き書き」部落解放の人たち(3)『ひょうご部落解放』17、一九八四年二月、一一〇頁
- (50) 「全国更生連盟創立趣意書」前掲『執務日誌』大正六年二月編 水上郡春日町池尾区長文書(前掲『同和教育史兵庫県関係史料』二巻、二五〇～二五二頁)
- (51) 兵庫県清和会「兵庫県清和会要覧」昭和十五年八月現在、「本会役員異動表」
- (52) 「清和」一一四号、一九三六年四月
- (53) 村田哲也「神崎郡K村を中心とした部落解放運動―水平運動を中心として」兵庫県教育研究所『同和教育長期研修報告』六集、一九七六年三月、六六頁
- (54) 神戸地方裁判所検事局思想部「社会思想運動情勢調査報告書」(『部落問題、水平運動資料集成』三巻、五二八頁)
- (55) 「清和」一三九号、一九三八年一月
- (56) 「清和」一四七号、一九三九年八月
- (57) 「清和」一四八号、一九三九年九月
- (58) 前掲『執務日誌』大正六年二月編(水上郡春日町池尾区長文書)
- (59) 前掲「清和」一四八号、一九三九年九月
- (60) 「清和」一五八号、一九四〇年八月
- (61) 「昭和一六年度受付文書綴」四月以降(水上郡春日町池尾区長文書)
- (62) 鎌田珠子「兵庫県水平社の結成と地域改善に生涯をかけた清水喜市」兵庫県人権啓発協会『人権の確立に尽くした兵庫の先覚者たち』二〇〇四年一〇月、一六八頁
- (63) 鉄拐山人「清水喜市氏を偲ぶ」(前掲『清和』一五八号)によれば、「いろいろな意味で大正一二年と云ふ年は私に取って忘れ得ない年である。この年S運動(水平運動―引用者)が起った。(中略)私も除隊早々であったが、躊躇なく参加する気持ちになった。」「私が本県の委員長と云ふことになってから…」を考慮すると、初代県水平社委員長の長田調五郎は一八九九年の生まれ(小林丈広「近代・近郊農村の被差別部落(下)―加古郡播磨町の生活史」『ひょうご部落解放』31、一九八八年六月、二六九頁)で一九二三年当時は二四歳。二代目県水平社委員長の岸本順作は一八九二年生まれと年長で二三年当時三二歳。このため鉄拐山人は長田調五郎の筆名と考えられる
- (64) 大谷正「太平洋戦争下の満州農業移民―農民運動と融和政策に関連して」大阪歴史学会『ヒストリア』八七号、一九八〇年六月、四九頁